

## SFC における高大接続のスペイン語教育—多言語多文化社会構築に向けて 高等部における CEFR 準拠の教科書を使用した実践例

小倉麻由子(昭和女子大学)  
高島理恵(慶應義塾湘南藤沢他)

### 1. 背景・問題提起・目的

本発表では、慶應湘南藤沢高等部(以下、SFC 高等部)において 2018 年より実施している、ヨーロッパ共通参照枠(CEFR)に準拠した教科書を用いたカリキュラムの授業実践について、生徒たちの声を反映させながら紹介する。今日、少子高齢化やグローバル化が進む日本社会において、多様な背景を持つ人々と共生できる人間力の涵養は重要である。そのような中、言語の知識に加え、多文化共生社会を生き抜く力を養うことができ、かつ、高い汎用性を持つアプローチによるカリキュラムモデルを作成することを目的として、スペイン語に初めて触れる高校生(2 年生・3 年生)向けに CEFR 準拠の教科書を採択したカリキュラムで授業を実施している。本発表の目的は、この授業実践の具体的な事例を紹介するとともに、生徒の声を整理し、分析することで、プログラムの実施可能性やカリキュラム設計、副教材の開発、教育方法に関する課題を明らかにすることである。

### 2. 方法・結果

まず SFC 高等部におけるスペイン語の授業について、授業に関する基本情報(授業数や生徒数など)と生徒の特長を合わせて紹介し、教科書の採択理由と、この教科書がどのように構成されているかを説明する。そして、スペイン語初習者となる生徒たちに、スペイン語のみで書かれた CEFR 準拠の教科書を使い、複数の教員がローテーションを組みながらどのように授業を行っているかの実例を示しながら、それに対する生徒たちの声を紹介し、このような授業の可能性について考察する。生徒たちの声は、高校 2 年生と 3 年生の学年末に実施しているアンケート調査を通じて集められたもので、今回はその中でも教科書や授業の実施方法(副教材の有用性や、教員がローテーションを組むこと)に関する設問への回答に注目して分析した。特に 2021 年から 2024 年までに受講した 3 学年にわたり、生徒たちが自分たちのスペイン語が上達したと感じた瞬間があったのかどうか、また使用したスペイン語のテキストに対してどのような感想を持ったかについて 5 件法で聞き取りを行なった。その結果、上達を感じた瞬間があると回答した生徒は 77%、感じた瞬間がないと回答した生徒は 18.3%、無回答 4.7%であった。

### 3. 考察・結論

調査結果より、スペイン語のみで書かれたテキストを難しく感じ、使いづらさを感じている生徒が多い結果となったが、その中で「ためになる」と感じている生徒も存在していることが明らかになった。また、その結果はスペイン語が上達したと感じた瞬間がある生徒と、そうでない生徒の間で異なる傾向があることが判明した。スペイン語が上達したと感じている生徒は「難しすぎる」「使いにくい」を選択した比率がそうでない生徒より低く、また「ためになる」「使いやすい」「わかりやすい」を選んだ比率が高くなり、教科書に対してネガティブに捉えながらも良い面も見出すことができている。一方、スペイン語が上達したと感じていない生徒は「難しすぎる」「使いにくい」を選択した比率が高く、「ためになる」「使いやすい」「わかりやすい」を選択した比率が低い。以上のことから、上達したと感ぜられない生徒は、テキストに対しても否定的に捉える傾向にあることが判明した。そして、それに関するコメントの多くは、日本語での説明や指示文がないことに言及していた。本発表では生徒たちの声を紹介しつつ、スペイン語のみの教科書を高等学校で使用する注意点を、経験を踏まえて紹介し、今後の使用に向けての問題提起を行う。

(本研究は科学研究費 21K00791 の助成を受けています。)

#### 参考文献

- 小倉麻由子(2019)「SFC における多言語多文化社会構築に向けた、高大接続のスペイン語教育を目指して」『KEIO SFC JOURNAL』Vol. 19, No. 2, pp. 192-207.  
小倉麻由子・高島理恵他(2022)「SFC における多言語多文化社会構築に向けた高大接続のスペイン語教育—コロナ禍の下でのカリキュラム改革の経験—」『慶應義塾 外国語教育研究』慶應義塾大学外国語教育研究センター第 19 号, pp.99-123.